

## 生きる居場所を見出す ～ 心温まる おもてなし ～

2024年5月26日 電車で東久留米駅→秋津駅→新秋津駅→新八柱駅に向かい【『松戸常盤平がんカフェ』(代表：児島よし子氏)5周年記念講演会：病気であっても病人ではない ～ 樋野興夫先生に聞く ～』(千葉県松戸市の森のホール 21) に赴いた。 児島ご夫妻が車で新八柱駅に迎えに来て頂き昼食を共にした。 会場では、北田直人牧師夫妻をはじめスタッフの皆様が懸命に準備してくださり【心温まる おもてなし】には感服した。

『がん哲学・外来での言葉の処方箋の由来』についての質問では、【19歳からの『内村鑑三(1861-1930)・新渡戸稲造(1862-1933)・南原繁(1889-1974)・矢内原忠雄(1893-1961)の読書遍歴。教科書以外の最初の本は、筆者の島根県出雲市鷺峠の実家は、法然(1133-1212)の浄土宗の檀家で、中学生、高校生時代、浄土宗の開祖法然に関する本、弟子の浄土真宗の宗祖親鸞(1173-1263)の教えの『歎異抄』を熟読したものである。『歎異抄』に『人種、性別、年齢、能力、貧富に関係なく、誰もが平等に人間に生まれて良かった』とある】と。

【『空海(774-835)、最澄(767-822)、法然、親鸞は聖書を読んでいたか?空海(真言宗)、最澄(天台宗)は遣唐使として留学していた。空海は新約聖書、最澄は旧約聖書を日本に持ち帰ったのか?遣隋使の時代の聖徳太子(574-622)の『17条憲法』、親鸞の『歎異抄』には聖書的な言葉もありますね!?】とさりげなく語った。『ニューモア溢れる会話』で、会場は大いに盛りあがった。

また、【南原繁の『何かをなす「to do」前に、何かである「to be」ということをまず考えよ』ということが新渡戸稲造先生の一番大事な考えであったと思います】(拙著『がん哲学 ～ がん細胞から人間社会の病理を』2004年 to be 出版)も語った。【生きる目的を持ち、人生を大切に生きることができる居場所を見出す大切さ】を実感する『歴史からの学び』の講演会ともなった。

帰宅後は、息子夫妻が夕食とケーキを購入し持参してくれ wifeの誕生日を祝った。ただただ感謝である。大変貴重な充実した忘れ得ぬ1日となった。